

スリランカ史を紐解くと栄華と混迷の物語がある。その歴史は仏教と切り離せない関係である。ことに、上座部仏教<sup>1)</sup>の原点はスリランカにある。それを証する仏跡が各地に点在している。釈迦の遺骨の一部である仏歯が歴代の王宮に祀られていたという点からも上座部仏教の原点であると裏打ちできよう。シンハラ王朝が16世紀頃までに南下を繰り返して廃都になっていった遺跡群、中でもヤーパフワ(1272～1284)に遷都した12年間に私の密かな好奇心はそそられていた。そんな隠れたスリランカ観光名所を、2016年10月14日に訪れた。

### 🌸10ルピー札の妙味

「ほら、見て!! ダンバデニヤの跡だよ」「クルネーガラの大仏さまが見えてきたよ」と、車の助手席でタランガッレ・ソーマシリ師が指差した。せめて遷都の跡の空気だけでもと思い、静かな田舎道路や椰子並木、喧騒の街通りを走り続けた。ヤーパフワはコロomboから120kmの辺りに在り、マーホという小さな町の近郊である。日本人の旅行者によれば、ミヒンタレーやハバラナの観光後、まだ時間が余っているから寄ってみよう…という程度の観光地である。兎も角、私はそのようなことにおかまいなく、参拝したかった。朝、早くガンパハを出てヤーパフワに向かう車の中でソーマシリ師が話してくれた簡略史を、頭の中で思い巡らせた。シンハラ王朝がアヌラーダブラに築かれたのは紀元前377年、仏

教伝来は紀元前247年である。南インドで勢力を拡大していたチョーラ王朝に、10世紀末頃征服された。その後、首都がポロンナルワに移された。仏教の普及に力を注ぎ僧院が建立され、アジア随一の仏教都市として発展を遂げた。やがて、南インドのバーンディヤ王朝の権力闘争に破れ、ポロンナルワ時代の終焉を迎えた。都をダンバデニヤに移転、更にヤーパフワ、クルネーガラ、ガンポラとシンハラ王朝の首都は南下して行った。シンハラ王朝最後の都で16世紀末に辿り着いたのがキャンディである。イギリスの植民地となった1815年までの300年間、首都として繁栄した。同時に王権の象徴である仏歯を祀る仏歯寺<sup>2)</sup>が建立され、今日もスリランカの仏教徒の厚い信仰を集めている。車の後に座った私は、水田沿いの風景に視線を向けながら、遷都を繰り返した王朝の背後に何があったのかと考えた。 Deng熱やマラリヤなどの流行、気候異変、水災害や土壌の疲労など天災が主因であろう。勿論、経済悪化に伴う王権の弱体化、国の管理機構が崩壊していったことも原因の一つである。してみると日本の自然災害等にも同じようなことが云えよう。異なるのは、スリランカ北部の乾燥地帯から湿潤地帯に移動していったことで、仏教寺院と王宮、貯水地等が遺棄されてしまったことである。各遷都に共通するのは「岩山」(ロック)であり、王宮を要塞化し潜伏所として自分たちの身を守るために造った点にある。

2010年4月5日デノミネーションで紙幣がコインになったと聞いているが、そもそも、今は参拝者も少なくなっているヤーパフワへ向かった動機はスリランカの10ルピー札である。2016年度の今日も使用されているが、その紙幣の裏側に描かれているのは、ヤーパフワ遺跡の石段にある



ヤーパフワ遺跡の石段にあるライオン像  
(グーグル・パノラミオから)



仏歯寺 (ウィキペディアから)

「ライオン像」の彫刻で、このライオン像が私の中で肥大して行き是非とも見たいとの思いが募っていった。そろそろ目的地かしらと思うと、シーギリヤをコンパクトにしたような岩が見えた。

ヤーパフワはシーギリヤに比べて、少々地味で見劣りがしないでもないが、観点を変えれば趣は格別である。人伝に聞いていたよりは人の気配が多い気がする。ヤーパフワの遺跡はこの野原にどっかり座る石、石…? なのかしら? と思ったら車は止まった。カラフルに仏旗が舞って何処も彼処も清掃されている。この寺のご住職の采配が行き届いて、すみずみまで清潔感があり浄域らしい空気が流れている。それ丈ですっかり魅了されてしまった私に「ペラヘラ祭の前夜だから賑わっているんだよ」と、ソーマシリ師の言葉が入った。惹き付けられるように石段を上ると、チケットオフィスの前に、ブーゲンビリアの花々が活けられてあり心を奪われた。そこから見上げる石段は、急勾配である。「岩山の頂上まで険しくて道があるのか無いのか分からない。仏塔が残っているだけだからね」「その足で大丈夫かなあ? 無理だよ。無理!!」かつて私は健脚と云わ



スリランカ10ルピー札のライオン像。現在は10ルピーコインになって紙幣は流通していない。

(LovelyPlanetから転載<http://www.lovelyplanet.jp/index.html>)

れていたが、関節の手術後は3年間ものリハビリに明け暮れ、車イス生活も云々される程であった。幸いにして、海外旅行にも出れるようになった。スリランカに導かれたのは仏さまのお守りではないかと思える程である。直射日光を浴びながら蟹足で登り、休んでは登った。門や石柱の細かいデザインは東南アジアで眺めた彫り物や南インドのモチーフにもあった様を感じられた。カンボジアの遺跡にはヒンドゥ教の精巧な造りそのもののような印象であるから、国際交流、友好関係があったのであろう。ガードストーンには装飾が崩れずに残されており、キャディアンダンスのレリーフは生命感と躍動感にあふれている。小さな遺跡の中に、価値ある見所が沢山存在している。あちらこちらに眼を移動しながら私は興奮気味で、是非一見を勧めたい旧跡である。石段の真中辺でやっとユニークでコミカルなライオンと対面した。大きな目玉と大口を開いたライオンは、この先も険しいから気をつけてと云ってくれているのかしら? 折角此処まで来れたのだから、せめて石段の上までとがんばった。広場のような所に出た。そこから見晴す深緑や樹木の景観は言葉に尽せない雄大さがある。それにしても、どのようにして岩山の住人に食料を運搬したのであろうかと思い何気なく周囲を見廻した。と、この場所に「仏歯をご安置する建物」があったのか、私の仏を求める心に突然仏の声が語りかけて来た。その仏の声に古の人々の声なき声が重なり交差し私の中で反響する。初めての体験に私は呆然としてその場に立ち尽くした。ヤーパフワの廃墟の断片が語り部として、今も、私たちにスリランカの古を伝えている。

#### ■注

1) 上座部仏教：チベット、モンゴルから中国、韓国、日本に東アジアに広まった大乘仏教に対して、インドからスリランカに伝わり、ビルマ、ラオス、タイ、カンボジアに広がった南伝の仏教。かつて小乗仏教と呼ばれたこともある。厳格に戒律を守り、仏教本来の伝統を継承し、悟りを得ることを目的としている。

2) 仏歯寺：ダラダー・マーリガーワ寺院(英語:Temple of the Tooth)は、仏教聖地であるスリランカのキャンディに位置する寺。釈迦(仏陀)の犬歯(仏歯)が納められているとされる。